

現在完了形についての一考察

—— その本質的意味と効果的な指導法 ——

小 寺 茂 明*

Shigeaki KOTERA

Perfective Aspect of the English Verb

—The Essential Meaning and

How to Teach It Effectively—

0. はじめに

本稿は、英語教育的観点から、英語の現在完了形についてとりあげ、Aspect 的立場から、その本質的意味機能を解明することを目的としつつ、同時に英語教育での効果的な指導に役立てることをもねらいとするものである。それというのも、英語学習者が、この現在完了形という認識の Pattern について、どれほど正確な理解をもっているのか、はなはだ疑問に思われるからである。おそらくその本質的な意味機能の理解は十分ではなく、ただなんとなく漠然と理解しているに過ぎないのではないだろうか。

教室では通例われわれは、伝統的に、現在完了形のもつ意味用法を、「完了」、「結果」、「経験」、「継続」の四つに分類し、それぞれの典型的な例文を通して指導することになっている。しかしそれはしばしば分類のための分類という指導になりがちであり、生徒のほうも、「(ちようど)～したところだ」、「～してしまった」、「～した(そしてその結果今は…である)」、「～したことがある」、「ずっと～している」などといった日本語訳を機械的に頭から暗記してかかり、しかもそれを通してのみの理解にとどまる傾向にあるのではないだろうか。そしてそのために現在完了形に出会うたびに、どの訳語を当てはめればよいのかという判断に、英語の読みの重点が移ってしまっているということはないだろうか。もしそうだとすれば、現在完了形について、その本質的な理解は出来ていないと言わざるを得ないであろう。また、英語の現在完了形に対して、日本語ではこのように、「～した」、「～している」などという訳語を用いるが、これらの訳語は、日本語の時制的観念から言えば、それぞれ、過去及び現在であるから、日英両語の間に存在する時制

のズレを意識せず、日本語の時制概念で捕えていては、日本語にはない認識の Pattern である現在完了形を正しく理解することはできないであろう。

以上のようなことと関連して、たとえば、五島・織田(1977: 89)に次のような発言がみられる：

たとえば“*He has become a good student.*”を「よい生徒になりました」と訳す。こんどそれを英語に訳させると“*He became a good student.*”が出てくる。そしてこの文からは、“*He was a good student.*”という認識しか出てこない。たしか出発は“*He wasn't a good student.*”だったはずですが。だんだんとズレていって最後に脱線する。競合脱線ということですね。これが多い。一方、“*He has become a good student.*”は、“*He is a good student now.*”ということだと言うと、「そんならなんで最初からそう言えへんねん」と思うらしい。用法の分類に汲々としていて、現在完了の本質という視点からの指導がどうしても抜けてしまう。

ここに示されているような、現在完了形に対する、日本語(訳)に引きずられた誤解もしくは認識不足は、やはり英語教育における一つの欠陥ではないかと思われる。あるいは十分に再考の余地のあるところであろう。つまり、用法の分類に終始してきた今までの英語教育においては、英語の現在完了形は過去時制とどのように異なり、したがってどんな場合に過去時制と区別して現在完了形が用いられるのかといった、具体的で説得力のある、いわば本質的な指導が十分になされてこなかったように思われるのである。

1. Aspect としての現在完了形

さて、英語の動詞に関する最近の研究においては、その時制として、現在時制及び過去時制の二つしか認め

* 島根大学教育学部英語教育研究室

ず、したがって、いわゆる未来時制を認めないという立場が主流の見解である。そしてそのような見解においては、従来よく時制の中で論じられてきた、いわゆる完了形や進行形は Aspect (相) として捕えられていることが多い。

たとえば、Chomsky (1965: 42ff.) にみられる Aux (動詞補助語句) の展開は次のように公式化されている:

Aux → Tense (Modal) (Perfect) (Progressive)

これはまた、Chomsky (1965: 107) ではさらに次のように簡略に表記されている:

Aux → Tense (M) (Aspect)

変形文法においては、Tense (時制)、Modal (法助動詞)、Perfect (完了相)、Progressive (進行相)、Passive (受動相) の五つをさして、動詞補助語句というが、この簡略表記の意味するところは、英語の Aux という句において、Tense としては Past または Present のいずれかを必ず含み (必須要素)、さらに will, shall, can, may などの Modal を含んでもよいし、また含まなくてもよく (選択要素)、さらに Aspect として、Perfect または Progressive を、あるいはこれらの両者を同時に、含んでもよいし、また含まなくてもよい (選択要素)、ということである。

ところで、われわれの常識からしても、完了形や進行形において、時制としての機能を受け持つのは、それぞれ、いわゆる助動詞としての have 及び be の変化であるが、それはまた一方では、have + EN 及び be + ING という迂言形 (Periphrastic form) で、動作・状態の様相、即ち (Grammatical) Aspect をも示していると考えられよう。つまり完了形や進行形は Tense と Aspect の二つの要素が交錯・混在したものなのである。考えてみれば、伝統的な用語である Present Perfect やあるいは Present Progressive という名称そのものも Tense 及び Aspect の両面からつけられたものとみなすこともできよう。ただどちらかと言えば、Aspect としての要素のほうが強いので、現代言語学者の考え方の多くは、Aspect 的解釈に傾いていると言えるのである。

以上のような Aspect 的考えは、Chomsky に限らず、その他、たとえば、Close (1962)、Ota (1963)、Leech (1971)、Quirk et al. (1972)、Quirk and Greenbaum (1973) など多くの学者の間に見出されるし、完了形に対しては、Twaddell (1963²) は Current relevance という用語を用い、Joos (1968²) や Palmer (1974) は Phase という用語を用いているが、それらもやはり同じ見解に属するものと思われる。あるいはまた、Hornby (1954) や Jespersen (1931) などは Inclusive Present という用語を用い、Jespersen はさらに、Retrospective aspect という考えも示している。

ところで、(進行形についてもそう言うのだが) このように、現在完了形について、その伝統的な Present Perfect という名称にあきたらず、さまざまな呼称が考え出されているということ自体、それが単に時制を示すだけのものではなく、同時にまた、その本質がなかなか捕え難いものであることをも示しているものと言えよう。が、それはともかく、われわれとしての当面の問題は、この現在完了形のもつ本質的意味機能がいったい何であるのかを解明することでなくてはならないのである。

現在の変形文法における Aspect の意味解釈についてはまだ十分に検討されていないし、もちろんそれに対する共通見解もない。また、Aspect のもつそれぞれの細かなニュアンスまでを含めた意味解釈規則の体系化はかなり困難であり、かつ複雑なものになることが予想される。結局いまのところ、時の意味解釈において、その解釈のしかた (「読み」) にどれだけのものを用意するかという問題に答えるためにも、伝統文法的な立場をも基盤としながら、Data-oriented な経験的・実証的な研究が必要であるように思われる。

2. 現在完了形の実例の検討 — その特徴を探る —

文法書などにあげられている例文やその理論的説明だけでは、それが実際にどのような場面で用いられているのか明らかでないことも多く、また、十分に納得がいくためには、単にそれを鵜呑みにするだけではいけない。各学者の説を検討する前に、収集した Data を検討しながら、まず現在完了形の特徴を探ってみることにしよう。

2.1 資料収集用文献及び資料収集基準

ここでは現代英語から、現在完了形の用例をちょうど 300 例収集してみた。用例になるべく偏りが生じないように、いくつかのジャンルから at random に作品を選んで収集したが、用いた作品は、*The Pool* (1958, 英宝社: モームの短編小説)、*Animal Farm* (1951, Penguin Books: オウエルの代表的中編小説)、*The Little Prince* (1966, 英光社: サン・テグジュペリ原作の童話の英語版)、*How I Discovered America* (1968, 英潮社: J. カーカップのアメリカ旅行に関するエッセイ)、*The Rose Tattoo* (1958, Penguin Books: T. ウィリアムズの戯曲)、*A Child's Bible: New Testament* (1973, Pan Books: 小供向きに書き直した新約聖書)、及び *Contemporary English 7* (1973, Silver Burdett: 中学一年生程度のアメリカの国語の教科書) の七冊である。それぞれの作品にみられた現在完了形の用例数を示せば次のとおりである:

1. <i>The Pool</i>	14 (72)
2. <i>Animal Farm</i>	47 (120)
3. <i>The Little Prince</i>	89 (107)
4. <i>How I Discovered America</i>	29 (62)

5. *The Rose Tattoo* 50 (113)
 6. *A Child's Bible* 35 (pp. 1-100)
 7. *Contemporary English 7* 36 (pp. 5-24)

なお、()内の数字はそれぞれの作品の総ページ数、ただし、6.と7.については資料収集に用いた範囲のページ数を示す。

また、資料収集の際の基準は次のとおりとした：

1. いわゆる準動詞の完了形や、法助動詞とともに用いられた完了形及び現在完了進行形の用例は除く。
2. とくに *The Rose Tattoo* に頻繁にみられるが、*have got (to)* は *have (to)* と同じ意味であるので除く。したがってまた、やはり *The Rose Tattoo* に頻繁にみられる、文(1)、(2)のような、単に *got (to)* だけで *have got (to)* の意味に用いられているものも除くことはもちろんである：
 - (1) Maybe he needs the opposite kind of a powder, I got that, too. (21)
 - (2) I got to get to the high school! (41)
3. 同じく *The Rose Tattoo* にみられる文(3)のような場合は、*been=have been* と考えられるが、正式な語法でないとして判断して、やはり除く：
 - (3) I been to The Ideal Barber's! (88)
 [have の脱落。Cf. *got=have got (=have)*]
4. 文(4)のような場合は、現在完了形及びそれと共起している Adverbial の *never* もそれぞれ三回ずつ用いられたものとして count した：
 - (4) What small child **has never hit, kicked, or tried** to bite a playmate to express disapproval? (*Contemporary English*: 12)

以上のような基準をもとに用例を収集したが、わずかの300例に過ぎないので、資料として必ずしも十分とは言えないかも知れないが、次に、これらの用例を観察することによって得られた、現在完了形についての所見を述べることにしよう。

2.2 現在完了形の使用頻度と文体

ここに収集した資料から判断して、現在完了形は明らかに口語体の文章において多用されると言うことができる。たとえば、*The Pool* における14の用例のうち、地の文での用例はわずかに1例のみであり、その他はすべて引用符を付した会話体の文章の中にみられるものであった。あるいはまた、*Animal Farm* にいたっては、47の用例のすべてが会話体の文章の中にみられるものであり、地の文での用例はみあたらなかった。*The Rose Tattoo* もト書その他を考慮すれば、口語に基づく戯曲であるだけにやはり現在完了形は多用されているし、*The Little Prince* は、会話体を中心に Story を運んでいるだけに、その用例がかなり多くなっていると言えよう。会話体が現在時を基準にしての発話であることから、

現在時制の一種である現在完了形も多用されるのは当然のことなのである。

それに対して、*The Pool* や *Animal Farm* のように過去時を基調とした小説では、過去時制の一種である過去完了形が多用されているということになる。ただ、そのような Story といえども、過去時制のみの使用からくる単調さを打ち破るために、文体上の工夫として、引用符を付した会話体が、適宜、用いられるということになるのであろう。

以上のことから、過去完了形が Literary (Written) style であるのに対して、現在完了形は Colloquial (Spoken) style であると言えよう。したがって、また、Thomson and Martinet (1969²: 105) が指摘するように、現在完了形が「おもに会話、手紙、新聞、ラジオの報道で用いられる ('chiefly used in conversations, letters, newspapers, and wireless reports')」というふうなづけることであるように思われる。

2.3 動詞の使用頻度

300例の現在完了形において、どのような動詞が多く用いられているかは一応検討すべきであろう。それについて調べてみると、二回以上用いられている動詞を、その頻度数とともに列挙すれば、*be* (19), *see* (18), *do* (12), *make* (12), *go* (11), *have* (11), *come*(7), *hear* (7), *eat* (6), *give* (6), *happen* (6), *find* (5), *know* (5), *lose*(5), *put* (5), *tame* (5), *tell* (5), *change*(4), *become* (3), *conceive* (3), *discover* (3), *forget* (3), *leave* (3), *win* (3), *arrive* (2), *catch* (2), *cross* (2), *decide* (2), *destroy* (2), *drop* (2), *get* (2), *lay* (2), *look* (2), *love* (2), *live* (2), *miss* (2), *pass* (2), *prove* (2), *read* (2), *run*(2), *stand* (2), *take* (2), *try* (2), *waste* (2) という結果であった。ただし、Story の展開において、そのなりゆき上、たまたまある動詞が多用されているということはあるかも知れない。たとえば *tame* (5) などはその例と言えよう。*The Little Prince* において、*tame* という動詞は、その登場人物(?)の Fox との出会いの場面で、その Theme にかかわる Key word であるために、そこで連続的に使用されているものであるからである。が、それはともかく、この結果を一見しただけでも、いかに日常的な基本的な動詞が多く用いられているかがわかるが、それはまた、現在完了形が口語体であることを裏付けるものでもあろう。

なお、次にこの頻度数からみて代表的な動詞の例文を少し、*Animal Farm* から、あげておくことにしよう：

- (5) Snowball! He **has been** here! I can smell him distinctly! (69)
- (6) Donkeys live a long time. None of you **has ever seen** a dead donkey. (27)
- (7) What he **has done** since is different. (71)

(8) I trust that every animal here appreciates the sacrifice that Comrade Napoleon **has made** in taking this extra labour upon himself. (49-50)

(9) Every drop of it **has gone** down the throats of our enemies. (9)

また、現在完了形の受動態の例は比較的少なく、300例のうちの26例であり、現在完了進行形の用例はさらに少なく、調査した資料文献の範囲には、わずか12例しかみとめられなかったことを付記しておく。

2.4 意外に少ない State Verb の使用

次にこれらの動詞を調べてみると、いわゆる状態動詞 (State verb) の使用が意外に少ないことがわかる。上記の *be* (19), *have* (11), *know*(5), *live* (2), *love*(2) のほか、明らかに状態動詞として用いられているものとして、*inhabit*, *wear*, *keep*, そして受動態で用いられている *concern* [Cf. 文(9)] をあげることができる程度である。

しかもこのうちで、たとえば *be* について言うならば、文(10)のように、状態を示す形容詞などがその補語として用いられていれば、一応それは継続を示すと考えられるが、それとて、たとえば文(11)のように *never* が共起してあれば、それは明らかに経験を示すことになるし、文(5), (9)のように、*go*, *come* の代用としての *be* や、文(9), (14)のように、いわゆる「*There is* 構文」の *be* は経験もしくは反復を示すものと考えられよう：

(10) I have flown a little over all parts of the world; and it is true that geography **has been** very useful to me. (*The Little Prince* : 9)

(11) He **has never been** either hungry or thirsty. (*The Little Prince* : 88)

(12) They seek to have actual proof that they **have been** to a certain place in their own islands or abroad, because for the Japanese travel, and particularly travel abroad, is still a fairly unusual and exciting experience. (*How I Discovered America* : 41)

(13) If you're like most people, *there have been* many times when you've thought, "I just can't wait to tell Susie" (or John or Mom or someone else). (*Contemporary English* : 5)

(14) Recently *there has been* quite a hassle over the length of boys' hair. (*Contemporary English* : 21)

さらにまた *have* について以下の用例を検討するならば、そのすべてが本来の「持っている」という意味では

なく、「手に入れる、(経験として)持つ、食べる、飲む、(子を)産む」のような意味で用いられていることがわかる。つまり *have* は動作動詞 (Action verb) として用いられているのである：

(15) You've **had** your warning and you'd better take it. (*The Pool* : 64)

(16) I **have had** a long life, I **have had** much time for thought as I lay alone in my stall, and I think I may say that I understand the nature of life on this earth as well as any animal now living. (*Animal Farm* : 8)

(17) In return for your four confinements and all your labour in the field, what **have** you ever **had** except your bare rations and a stall? (*Animal Farm* : 9)

(18) I am twelve years old and **have had** over four hundred children. (*Animal Farm* : 10)

(19) In the course of this life I **have had** a great many encounters with a great many people who have been concerned with matters of consequence. (*The Little Prince* : 9)

(20) Not every one **has had** a friend. (*The Little Prince* : 22)

(21) I **have had** to grow old. (*The Little Prince* : 23)

(22) At most parties the host gives people the best wine first and saves the cheaper stuff until they've **had** plenty to drink. (*A Child's Bible* : 54)

(23) How long **has** he **had** this condition? (*A Child's Bible* : 93)

(24) You **haven't had** anything to eat for twenty-four hours. (*Contemporary English* : 7)

したがって、たとえば文(9), (14)が継続を示しているとするれば、それはそこに用いられている *have* のせいではなく、*How long* ~?, *for twenty-four hours* という Adverbials (副詞語句) の効果によるものと考えられよう。もしこれらの Adverbials がなければ、これらの完了形が何を意味しているのか判然としないからである。

さらに念のために、代表的な状態動詞と考えられている *live* 及び *love* について、それぞれみられた例文を比較検討してみよう：

(25) I **have lived** a great deal among grown-

ups. (*The Little Prince* : 9)

(26) But it is also the most inhuman, commercial and cynical place I **have** ever **lived** in. (*How I Discovered America* : 22)

(27) I **have** always **loved** the desert. (*The Little Prince* : 89)

(28) He **has** never **loved** anyone. (*The Little Prince* : 32)

文②, ③は継続, 文④, ⑤は経験を, それぞれ, 示しているものと考えられるが, それは, それぞれの文に共起している Adverbial によって imply されているものであって, 決して *live* や *love* という動詞が継続や経験という意味を示すものではない。したがって, もしかりに文④, ⑤において, それぞれの Adverbial である *always* と *never* とを入れかえたならば, 完了形の意味までも入れかわってしまうであろう。そしてまたこれらの Adverbials がなければ, それぞれの文は漠然とした意味しかもたないのである。

さて, 以上検討してきたことから次のことが言えるように思われる。まず第一に, いわゆる状態動詞と言われている動詞が現在完了形として用いられた場合, それは必ずしも継続ばかりを意味するのではなく, 経験を示すことも多いということである。したがって, 状態動詞と動作動詞という動詞の分類は, ただ一般的な傾向としてそれが言えるだけであって, 必ずしも厳密なものではないと言えよう。そして二番目に言えることは, 継続や経験という意味は, 完了形そのものに内在するものではなく, 実は, それと共起している Adverbials の機能によって決まるものであるということである。つまり, 現在完了形の意味解釈上, Adverbials が決定的な役割を果たすということである。そしてその力は大変なもので, たとえば, *The birds have deserted them a long while.* (鳥がそれを去ってから久しい) [Cf. 太田朗 (1954 : 15-16)] というような文において, *desert* という瞬間的な動作を示す動詞の完了形でさえも継続の意味にしてしまうほどなのである。また, 第三番目に言えることは, 現在完了形の意味解釈上, Adverbials の機能が最優先するということは, 逆に言えば, 完了形それ自体は, 元来, 漠然とした不定の性格をもつ表現であることを意味するということである。第一の点についてはかなり具体的に検討したので, 第二, 第三の点について以下もう少し検討してみることにしよう。

2.5 現在完了形と有意味的な Adverbials の共起頻度

現在完了形と有意味的な共起関係をもつと考えられる Adverbials は全体で75例が認められたが, その使用頻度を調査したところ次のような結果が得られた。即ち, 二回以上用いられているものは, *ever* (14), *never* (12), *since* (10), *already* (6), *just* (4), *yet* (3), *for*~(3),

~*times* (3) [*three times, four times, many times*], *once* (2) [*once, once or twice*], *always* (2), *now* (2), *during* (2) で, その他 *in the course of this life, in his life, in two or three days, in six days, for generations, all this while, How long ~ ?, until now, recently, from year to year, from time to time* などすべて一回限りの使用のものであった。

ただし, 文②のように一つの文の中に二つの Adverbials が共起している例もあるので, もっと厳密に言えば, 現在完了形の72例のみが有意味的な Adverbials と共起しているに過ぎないということになるのである:

(29) Six years have *already* passed *since* my friend went away from me, with his sheep. (*The Little Prince* : 22)

いずれにせよこれは, 300例のうちのせいぜい四分の一ということができるが, 予想していたよりもかなり少ない結果と言えるのではないだろうか。現在完了形にとってこれらの Adverbials は, 必ずしも obligatory な Element ではないが, その意味を明確化するために, いわば意味合図の標識として用いられているものと言えよう。したがって, 上記の Data から, 継続を示すには *since*~, *for*~ が, 経験を示すには *never, ever, ~times, once, twice* が, そして完了を示すには *already, just, yet* が, それぞれ, よく伴うということが確認できるように思われる。ただし, 結果を示すための標識はとくには存在しないようである。

2.6 現在完了形の Semantic Ambiguity

さて, 2.4 において, 現在完了形は, それと共起している Adverbials をとり去れば, その意味が漠然とした不定の性格をもつものであることを指摘した。即ち, たとえば文④, ⑤において, それぞれの Adverbial をとり去れば, それらの意味は, 継続または経験のどちらにでもとれるわけで, このような Adverbials がなければ意味が判然としないのである。

あるいはまた, 次のような文⑥を考えてみよう。

(30) I've read *The Hound of Heaven*. It's a bit of all right. (*The Pool* : 15)

この文⑥は, 継続を意味するためには現在完了進行形にする必要があるだろうし, また完了を意味すると解釈するには Context からして少々不自然であろうが, 経験とも結果とも判断できない文であろう。もちろん, この場合は, どちらの解釈でもよいし, またどちらに解釈してもさして意味は変わらないかも知れないが, このように, 複数の解釈が可能であることをここでは, 現在完了形の Semantic ambiguity と呼ぶことにしよう。そして, 現在完了形の大半の用例に意味合図の標識としての Adverbials が共起していないことから, このような Ambiguity をもつ例は無数に存在するものと言えよ

う。

ではなぜこのような Semantic ambiguity を現在完了形はもっているのかということが問題となるかも知れない。しかしこれは、この現在完了形という形式そのものの歴史的な成立過程を考えれば当然のことであることがわかるのではないだろうか。即ち、たとえば Curme (1931: 358) の説明:

The present perfect has developed out of the present tense of transitive verbs: 'I have written the letter,' originally 'I have the letter written,' i. e., in a written state.

にしても、あるいは細江 (1973: 51) の説明:

今日の I have written a letter. は昔 Ic hæbbe gewrit āwriten (or gewriten). と書いたもので、"I possess a letter (as) written" をその原義としたものであると断定できる (全然今日の配語形態になったのは14世紀)。

にしても、「(今までに) ~を…した状態で (あるいは…したものと) もっている」というのがその原義 (Original meaning) と考えられているからである。

現在完了形の原義をこのように考えれば、継続、経験、完了、結果というすべての用法が、Context, とくに Adverbials との関連から、総括的に説明可能であるように思われる。即ち、たとえば文①は、

I have the desert loved × always

つまり、「常に私は砂漠を愛した状態でもっている」ということで、これが継続の意味となることは明らかであるし、同様に、文②も

He has anyone loved × never

つまり、「彼はだれかを愛した状態でもっている、ということとは決してない」ということで、これが経験の意味となることも当然のことであろう。あるいはまた次のような文③を考えてみよう:

(31) It **has all been proved** by documents which he left behind him and which we **have only just discovered**. (*Animal Farm*: 69)

この文③には二つの現在完了形が用いられているが、あとのほうの例は、

We have discovered × only just

つまり、「われわれは、たったいまちょうど、(書類を) 発見した状態でもっている」ということで、これが完了の意味となることも当然であろう。また、文④や⑤の最初の用例などには、標識となる Adverbial がないので、一応 Original meaning の最も濃厚なもの、即ち結果を意味すると解釈するのが自然なように思われる。そして、現在完了形が結果を示すことが多いのも、このような Adverbials が共起していない例が全体の四分

の三もあるということとは無関係ではないであろう。

以上検討してきたことから、現在完了形の Original meaning は生きており、それからいろいろな意味用法が Context, 特に Adverbials との関連から自然と発達してきたものであることが容易に了解されよう。つまり、現在完了形は原義的には semantically ambiguous であると言えるのである。しかしながら、今日では、現在完了形が Aspect としての意味と形式をもつ以上、原義的解釈のみの理解では不十分であることは言うまでもない。

3. 現在完了形の本質的意味機能

現在完了形のもつ意味機能について、今までにさまざまな見解が示されてきているが、必ずしも一致した共通見解が存在するわけではない。ここでは、現在完了形に関するいくつかの学説を検討しながら、その本質的意味機能について考察してみることにしよう。

3.1 現在完了形は現在までの期間を示すこと

Quirk *et al.* (1972: 91) によれば、現在完了形についての次のような、極めて簡潔でしかもその本質をついた記述がみられる:

The present perfect indicates a period of time stretching backwards into some earlier time. It is past with 'current relevance':

simple past: John *lived* in Paris for ten years
present perfect: John *has lived* in Paris for ten years

The simple past of the first sentence indicates that the period of residence in Paris has come to a close. The perfective aspect here denotes that John still lives there at the moment of speaking (although there is no implication that his residence there will continue).

これは、つまり、現在完了形の本質的意味機能についての、I. 現在から過去のある時点に遡及するところの期間、及びII. 何らかの意味で、'現在との関連'をもつ過去、という二つの観点からの定義である。そして、II. については、単純過去時制と比較しながら、その Current relevance について説明しているのである。

われわれは現在完了形についてのこの定義をほぼその結論として受け入れてよいものであるが、いわゆる伝統文法や学校文法における通常の説明とは全く異なるものであるため、なぜそういう結論になるのか、もう少し具体的に考察を進めてみることにしよう。ここではまずI. について、そしてII. については次の Section で、それぞれ、扱うことにする。

さて、Bryan (1959) は、Poutsuma, Krusinga, Curme, Jespersen らの説く、完了形のもつ継続・結果・

反復・完了などといった意味範疇についてそれぞれ詳細に用例を吟味しながら反駁を加えたものであるが、完了形に対して Bryan (1959: 6-7) は次のような見解をもっている：

英語の完了時制は、過去時制と違って、動作・状態を過去の一点に位置づけることが出来ない。それは過去において始まり、現在まで、乃至は、現在の直中にまで広がる期間の中に動作・状態を位置づけることが出来るにすぎない。この期間の発始点 (*terminus a quo*) は一どれほど現在に近くても、また、どれほど現在から遠く隔たっているもよいが一現在に先行している任意の点とすることができるが、その終止点 (*terminus ad quem*) は常に、現に書いたり、話したりしている現在の瞬間である。すなわち、現在という観点に立って、話手は過去における或る継続した「時」のひろがりを見つめ、このひろがりの中に、動作・状態を位置づけるのである。この過去の「時」のひろがりには、次の文におけるように、瞬間的である場合もあり、“The messenger has just arrived.” (使者がたった今着いた)、次の文におけるように、相当の長さを持った期間である場合もあり：“The old house has been left untenanted for many years.” (その古家は長年無住のまま、放置されている)、また次の Shakespeare の言葉のように、過去全体を含んでいる場合もある。“Men have died from time to time and worms have eaten them, but not for love.” (人間は昔から死んで虫に食われてきましたが、恋のために死んだ人はありません)・・・

すなわち、完了時制は、動作・状態を、「時」の或る限界内に包括するだけであって、時制それ自体には、これ以外のなんらの働きがないように思える。

引用が長くなってしまったが、要するに Bryan は (現在) 完了形を、(現在までの) ある期間の中に動作・状態を位置づけるものとして捕えているのである。

この期間を示すという Bryan の考え方を継承・発展させた研究の一つに Ota (1963) があり、それは膨大な量の Data を用いて計数的な分析を行ない、帰納的な考察を推し進めたものである。Ota (1963: 41) には、

Present perfect, on the other hand, indicates the occurrence of an action or the existence of a state in or for a period of time extending from some time in the past up till the moment of speaking. . . . present perfect deals with the timespan stretching backward into the past from now, . . .

Both present perfect and past perfect indicate a period of time.

というふうに、繰り返して、現在完了形が期間を示すものであることが述べられている。そしてこのように、現在完了形が過去のある時から現在を含む期間を示すという考えは、Close (1962: 82), Palmer (1974: 49), Cook *et al.* (1967: 9), Leech (1971: 31), Quirk *et al.* (1972: 91), Quirk and Greenbaum (1973: 42) など近年多くの学者が主張していることがらなのである。

さらに Ota (1963: 57-58) はまた、Bryan (1959) と同じく、結果・継続・完了などというのは完了形の本質の意味機能ではないと結論している：

Resultative or non-resultative, continuative or non-continuative, completive or non-completive —these are nothing more than the tendencies of the context or the reflection of the lexical meanings of the verbs that go along with the perfect form and cannot be said to be the defining characteristic of perfect.

たしかに文脈や動詞そのものの意味を捨象した現在完了形そのものもつ本質的な意味機能は、“Period time”を示すことにあると言ってよいであろう。実際、このように、過去のある動作・状態を、現在までの期間という総括的な枠の中に位置づけて捕えるという、現在完了形に対する考え方は、そのすべての用例をうまく説明してくれるからである。

3.2 現在完了形は現在との関連をもつ過去であること

現在との関連 (Current relevance) という用語をはじめて用いたのは Twaddell (1963²) であると思われるが、Palmer (1974) なども用いているし、あるいは用語こそ異なっているが、多くの学者も、「何らかの意味での現在とのかかわり」ということは認めている。たとえば、Jespersen (1933: 243) の ‘the Perfect is a retrospective present, which connects a past occurrence with the present time, either as continued up to the present moment (inclusive time) or as having results or consequences bearing on the present moment,’ Scheurweghs (1959: 324-325) の ‘The present perfect, *the present tense of to have+past participle* is found when the action or the happening has some relation with the present,’ Close (1962: 82) の ‘the speaker is concerned with a period of time before and ending at point NOW,’ Cook *et al.* (1967: 10) の ‘the PRESENT PERFECT tense is concerned with “NOW” など、その他いくらかでも見出せるであろう。ここではこれらの「現在とのかかわり」という意味を、Current relevance という言葉で代表させて用いることにする。

さて、Twaddell (1963²: 2) は、いわゆる「have +

過去分詞」という語形に ‘Current relevance’ という用語をあて、その語形を、それに用いられている Lexical verb に対する Modification の一つとして捕えている。そしてその Modification として次の四つをあげている：

- I. ‘Past’ (-ed, -t, alternative form of stem, zero)
- II. Current relevance (*have*+participle)
- III. Limited duration (*be*+ -ing)
- IV. Passive (*be*+participle)

ここではこのうちの II. についてのみ、その説明として、Twaddell (1963²: 8-9) を引用しておくことにしよう：

Modification II, have + participle explicitly links an earlier event or state with the current situation. It signals a significant persistence of results, a continued truth value, a valid present relevance of the effects of earlier events, the continued reliability of conclusions based on earlier behavior. . . . put negatively, *have*+participle asserts that there has not been any intervening change to affect importantly the validity (or the inferences from the report) of an earlier event or condition.

つまり、Current relevance は「結果の有意義的な存続」、「真实性の持続」、「以前の出来事の効果が現在に有効に関連を持っていること」、「以前の行動に基づいて下した結論が依然として確かであること」[Cf. 国広 (1967: 84)] を意味するというのである。

さらに Joos (1968²: 140) はこのようなことをもって簡潔に述べている：

The perfect-marked verbs are there specifically for the sake of the effects of the events they designate, and that is the essential meaning.

. . . the perfect phase means that the event is not mentioned for its own sake but for the sake of its consequences.

即ち、結果や効果が現在完了形の本質の意味だというのである。

しかし、最も具体的な説明は Palmer (1965, 1974) にみられる。Palmer 自身は現在完了形は過去から現在までの期間を示すものであるという基本的な認識をもっているが、Current relevance を引き合いに出して次のような説明をしている。即ち、Palmer (1974: 51) によれば、次のような文

I’ve seen John this morning.
I’ve mended it three times today.
He’s written the letter.

において、動作そのものはすべて過去に起こっているのだから、同じ動作は過去時制形式

I saw John this morning.
I mended it three times today.
He wrote the letter.

によってでも伝えられたであろう。しかるにどうして現在完了形が選ばれているのかについて次のように説明している：

‘Why is the activity placed in the period of time indicated by the present perfect rather than the period indicated by the simple past, since it occurred within them both?’ It is here that we must refer to current relevance. A period of time that includes the present is chosen precisely because there are features of the present that directly link it to the past activity. The temporal situation being envisaged by the speaker is one that includes the present ; the present perfect, is, therefore, used.

以上の説明からも明らかのように、Current relevance は、現在完了形が現在を含む期間を示し、しかもその重点が現在 (Point NOW) にあるという考え方から必然的に随伴する効果・影響・結果といってよいであろう。したがってそれはいわゆる「結果」のみを意味するのではなく、もっと幅の広い comprehensive な捕え方であると言えよう。

さらに Palmer (1974: 51-52) にみられる現在完了形の例文及びその Implications を次に列挙しておくことにしよう：

I’ve bought a new suit. (I shan’t be untidy any more)
I’ve finished my homework. (May I go out to play now?)
They’ve left the district. (We shan’t find them or It’s no use calling on them any more)
I’ve cut my finger. (It’s still bleeding)
He’s broken the window. (It hasn’t been mended)
I’ve told you already. (You are stupid or I won’t tell you again)
They’ve fallen in the river. (They need help or Their clothes are wet)

You’ve had an accident. (I can see the bruises)
もちろん、これらは Context その他によって、ほかにもさまざまなニュアンスが伴い得るものである。

あるいはまた、Quirk *et al.* (1972: 91) にみられる次のような例文を検討してみることは示唆的であろう：

(1. a) His sister *has been* an invalid all her

life. (*ie* she is still alive)

- (1. b) His sister *was* an invalid all her life.
(*ie* she is now dead)
- (2. a) For generations, Nepal *has produced* the world's greatest soldiers. (*ie* the nation of Nepal must still exist)
- (2. b) For generations, Sparta *produced* Greece's greatest soldiers. (*ie* the state of Sparta may no longer exist)
- (3. a) Peter *has injured* his ankle and it's still bad.
- (3. b) *Peter *has injured* his ankle but now it's better.

これらはすべて、過去時制との比較において捕えられているが、それぞれの現在完了形は明らかに Current relevance をもつことがうかがえる例である。文(1. a)も(1. b)もいわゆる「継続」を示すが、Current relevance の意味をもたない故人に対しては(1. b)のように過去時制を用いるし、文(2. a)や(2. b)もやはり「継続」(または反復・習慣)を示すが、その主語がもはや存在しない場合は、やはり Current relevance の意義を失っているので、(2. b)のように過去時制を用いることになるのである。また、文(3. a)は「結果」(または完了)を示すと考えられるが、*injure* という動作そのものが現在にまで尾を引いているから現在完了形が用いられているのであって、もしもその負傷が直っていれば Current relevance をもたないので過去時制が用いられるはずであり、したがって(3. b)のように現在完了形を用いることはできないのである。

ただし、Twaddell (1963²: 9) も言っているように、過去時制が、決して Current relevance をもつことを否定するものではないことに注意しなければならない:

NB that the 'Past' modification by no means denies such current relevance; per se Modification I neither affirms nor denies that the earlier event or state is linked with the current situation.

そこで、たとえば次のような文(4. a)、(5. a)について考えてみよう:

- (4. a) It rained hard all night. [Cf. Bryan(1959: 12)]
- (5. a) Did you read that article in the newspaper? [Cf. Keene and Matsunami (1969: 58)]

これらの文は、それぞれ、その当然の結果として、明らかに文(4. b)、(5. b)のようなニュアンス、つまり Current relevance をもつものである:

- (4. b) The earth is wet this morning.
- (5. b) You can talk to me about it.

したがって、過去時制といえども Current relevance をもつわけであるから、それをもつことは現在完了形の必要条件ではあっても、必ずしも十分条件ではないということができよう。つまり、否定的に言うなら、Current relevance がないのに現在完了形は用いられないということなのである。

ところで、過去時制にとって Current relevance は必要条件でもなければ十分条件でもないにもかかわらず、過去時制も Current relevance をもつことがある以上、過去時制と現在完了形をどのように使い分けられよいかという問題が生じることになる。が、これに関して重要な Point は、現在完了形が「現在を含む期間を示す」のに対し、過去時制は「現在を含まず、現在とは時間的に断絶・間隙があることを示す」ということであろう。即ち、Speaker の意識・関心が、現在完了形の場合は Point NOW にあり、したがって現在としての意識が強く、過去時制の場合はそれが Point THEN にあり、したがって過去としての意識が強いということができよう。Speaker のこのような認識の相違が現在完了形と過去時制との使用上の選択を決定するものと言えるのではないだろうか。

このことをたとえば次のような例で確認してみよう:

- (6. a) Now where did I put my glasses?
- (6. b) Now where have I put my glasses? [Cf. Leech (1971: 38)]
- (7. a) I saw him this March.
- (7. b) I have seen him this March. [Cf. Leech (1971: 41)]

メガネを置き忘れた人は、文(6. a)、(6. b)のどちらをも用いることができる(interchangeable)が、この両者にはやはり認識のしかた、重点のおきかたに相違が認められる。即ち、(6. a)はメガネをなくした過去のある特定の時点に Speaker の注意が向けられているし、(6. b)はその動作のもつ Current relevance にその注意が向けられているといえよう。したがって(6. b)の場合は、'Where are they now?' というニュアンスの意識が濃厚であるといえるであろう。また、文(7. a)には、「三月はもう終わっている」という過去の意識がみられ、(7. b)には、「三月はまだ終わっていない」という現在を含む意識がみられるであろう。そしてこれらの相違が、過去時制及び現在完了形の選択決定の重要な Psychological element として機能しているように思われるのである。

3.3 現在完了形は時間的に不定であること

現在完了形は明確に過去時を示す Adverbials と用いることはできないとよく言われるが、ここではこのこ

とに関連して、現在完了形のもつ 'Temporal indefiniteness' [Cf. Kałuza (1977: 17)] について、若干考察してみることにしよう。

たとえば Leech (1971: 32) は、次のような文
Have you been to America?

は、その動作の回数及び時間の両方が不定 (unspecified) であるという。回数については頻度副詞などによって補われるとしても、時間の不定性については、それが現在完了形の一つの特徴と考えられるだけに、一考を要する問題であるかも知れない。

しかしながらこの Temporal indefiniteness についても、今まで検討してきたこと、即ち現在完了形は、過去の動作・状態を現在を含む期間の中で捕えるものであるという考え方、換言すれば、動作・状態そのものは過去に起こり、しかもそれが Current relevance をもつという二重の考え方からして、それは必然的な結果に過ぎないことがわかるであろう。つまり、現在完了形は明確に過去とも現在とも言えないわけで、時間関係は極めて漠然としているのである。そしてその当然の結果として、それと共に起る時の Adverbials にもおのずと制限が生じるわけで、明確に過去を示すものや、まして未来を示すものは用いられないが、現在を含むものは用いることができるということになる：

*I have seen him yesterday.

*I have seen him tomorrow.

I have seen him today.

また、Kałuza (1977: 17) は、次の例が示すように、動作・出来事そのものの時間は決して十分に決定されることはない ('the time of the event itself is never fully determined.') という：

I have worked this morning.

*I have worked at eight o'clock this morning.

さらに Curme (1931: 360) は現在完了形が時間的に不定であるのに対し、過去時制は時間的に定であることも述べている：

The present perfect can be used of time past only where the person or the thing in question still exists and the idea of past time is not prominent, i. e., where the reference is general or indefinite: 'John has been punished many times' (general statement), but 'John was punished many times last year (definite). 'I have been in England twice' (indefinite time), but I was in England twice last year.'

同じ主旨の説明はまた Quirk et al. (1972: 92) などにもみられる：

In the following examples the past implies definite reference and the perfect indefinite

reference :

Did you hear Segovia play? ('on a certain occasion')

Have you heard Segovia play? ('at any time')

以上のことから、たしかに現在完了形は時間的に不定であり、過去時制は定であることを認めてもよいであろう。したがって、たとえば Leech (1971: 37) などが指摘しているように、会話を始める際不定の現在完了形から定の過去時制へと移行する Pattern は注意されてよいものであろう。たとえばそこにあげられている次のような会話の流れはごく自然なものであるように思われるのである：

A: I've only been to Switzerland once.

B: How did you like it?

A: It was glorious—we had beautiful weather all the time.

同じような主旨の発言はまた、Quirk and Greenbaum (1973: 44) にもみられる：

Through its ability to involve a span of time from earliest memory to the present, the perfective has an indefiniteness which makes it an appropriate verbal expression for introducing a topic of discourse. As the topic is narrowed down, the emerging definiteness is marked by the simple past as well as in the noun phrases. そして次の2例があげられているが、話題がしぼられてくるにつれて定的な感じが強くなり、それが名詞句にも動詞句にも明示されるようになるというのである：

He says that he has seen a meteor at some time.

(between earliest memory and the present)

He says that he saw the meteor last night that everyone is so excited about.

そしてまた、時を示す副詞句もそれに応じて定的な表現が用いられることはもちろんである。

なお、このように、現在完了形が時間的に不定であり、しかもその意味も文脈に依存するということを考え合わせると、現在完了形に対する細江 (1973: 69) の「確認確述」という定義、即ち、「ただその陳述される事件が、言者の発言する際その知覚意識内に強力な印象を与えているとき、それを明りょう確実に表示するのがこの語形の本義である」という考えは必ずしも的を得たものとは言い難いように思われる。それはこの二つの考え方が本質的に相容れないものであるからである。

4. むすび

今までの英語教育における現在完了形の指導は、たしかに四つの用法に分類整理して教えることに終始してきたと言ってよいであろう。これは多分に便宜的なもので

あったにせよ、英語学者の説明のなかには、継続・経験・完了・結果の四つに分類しているものはどうも見当たらないようであるし、学者によってはその他反復・習慣・不定過去・状態・・・・というふうに、分類のしかたもその呼称も異なり、それぞれの説が極めてまちまちであることを考えると、日本の英語教育においては、その是非はともかくとして、まさに画一的な指導が行なわれてきたと言えるのである。

ところで2.6において、現在完了形がいくつかの意味に解釈が可能であること、即ち、その Semantic ambiguity についてみたが、これはとりもなおさず従来の四つの分類による指導では処理しきれないことが多いことを示すものであると言えよう。したがって、現在完了形は必ず四つの用法のどれかであり、必ずそれで割り切れるのだといったニュアンスの伴う指導は問題であろう。用法の区別を厳密に指導することは、逆にわれわれ自身の首をしめる結果となるからである。

さらにまた、現在完了形が Semantic ambiguity をもつということ自体、今までの指導がその本質を十分に捕えたものではなかったことを示しているように思われる。即ち、これは Context 及び Adverbial の機能を捨象した現在完了形そのものもつ本質の意味はもっとほかに存在するのではないかということを用意させるものなのである。そしてわれわれに必要なものは、これらの四つの用法のすべてを包括的に説明してくれる comprehensive な本質的な捕え方であろう。けだし、それが即ち効果的な指導法に直結するものであるからである。

さて、3.において、Aspect 的な新しい視点から、そのような現在完了形の背後に存在するはずの本質の意味機能を求めて検討してきたのであるが、そこで論じた重要な Points として、

- I. 現在完了形は現在までの期間を示すこと
- II. 現在完了形は現在との関連をもつ過去であること
- III. 現在完了形は時間的に不定であること

の三つをあげることができるが、本質の意味はやはり I. であって、II. 及び III. はその副次的な効果であると言えよう。現在完了形がこのように本質的には期間を示すものであるという考え方は、すべての用法をその枠内の動作・状態として無理なく説明してくれるし、従来の伝統文法家にはこのような観念が希薄であったために、彼らはその表面的なニュアンスの相違に幻惑され、その本質を見失ってきたきらいがあると言えるのではないだろうか。

ところで、効果的な指導法についての具体的な実践計画そのものについては、ここでは示し得なかったが、今後の指導のあり方の方向として次のようなことが望まれると言えよう。即ち、今までは四つの用法の指導に重点を置き過ぎてきたが、それはあくまでもニュアンスの指

導に過ぎず、本質的な指導ではなかったのであるから、そのような表面的な細かな分類による指導だけではなく以上に検討してきた本質の意味機能をふまえた上での指導が望まれるということである。いわば指導上の重点の比重を逆転させる必要があるであろうし、またそのニュアンスの説明にしても、単に「結果」だけではなく、すべてを統一的に処理できる Current relevance という comprehensive な考え方による指導が望まれると言えよう。なお最後に、われわれはふだんほとんど意識しないが、現在完了形の Original meaning は依然として生きているのであるから、この原義的な説明も案外有効なのではないかと思われることも付言しておきたい。

5. 参 考 文 献

- 荒木一雄他 (1977) 『助動詞』東京：研究社
 Bryan, W. F. (1959) 「現代英語の過去と完了」(中條和夫訳) 東京：研究社
 Chomsky, N. (1957) *Syntactic Structures* The Hague: Mouton
 — (1965) *Aspects of the Theory of Syntax* Cambridge, Mass.: M. I. T. Press
 Close, R. A. (1962) *English as a Foreign Language* London: George Allen & Unwin
 Cook, J. L. et al. (1967) *A New Way to Proficiency in English* Oxford: Basil Blackwell
 Curme, G. O. (1931) *Syntax* Boston, Mass.: Heath
 五島忠久・織田稔 (1977) 『英語科教育 基礎と臨床』東京：研究社
 Hornby, A. S. (1954) *A Guide to Patterns and Usage in English* London: Oxford Univ. Press
 細江逸記 (1973) 『動詞時制の研究』(新版) 東京：篠崎書林
 Jespersen, O. (1931) *A Modern English Grammar on Historical Principles* (Part IV) Copenhagen: Munksgaard
 — (1933) *Essentials of English Grammar* London: George Allen & Unwin
 Joos, M. (1968²) *The English Verb: Form and Meanings* Madison, Wis.: Univ. of Wisconsin Press
 Kałuza, H. G. (1977) "Systemic Definitions of the Present, Present Perfect, and Preterite Tenses" *The English Teaching Forum* (USIA) Vol. XV No. 3 pp. 15-18
 Keene, D. and Matsunami, T. (1969) *Problems in English* Tokyo: Kenkyusha
 Kuruisinga, E. (1931⁵) *A Handbook of Present-Day English* (Part II, 1) Groningen: Noordhoff
 国広哲弥 (1967) 『構造の意味論—日英両語対照研究—』東京：三省堂
 Leech, G. N. (1971) *Meaning and the English Verb* London: Longman
 太田朗 (1954) 『完了形・進行形』東京：研究社
 Ota, A. (1963) *Tense and Aspect of Present-Day American English* Tokyo: Kenkyusha

- Palmer, F. R. (1965) *A Linguistic Study of the English Verb* London : Longman
- (1974) *The English Verb* London : Longman
- Quirk, R. *et al.* (1972) *A Grammar of Contemporary English* London : Longman
- Quirk, R. and Greenbaum, S. (1973) *A University Grammar of English* London : Longman
- Scheurweghs, G. (1959) *Present-Day English Syntax* London : Longman
- Thomson, A. J. and Martinet, A. V. (1969²) *A Practical English Grammar* London : Oxford Univ. Press
- Twaddell, W. F. (1963²) *The English Verb Auxiliaries* Providence, R. I. : Brown Univ. Press
- Zandvoort, R. W. (1969⁵) *A Handbook of English Grammar* London : Longman